

研究ノート

不易流行・不産流寓・不動産流通（中） 変態と変容（3）

渡辺 直行

3. 近代都市の行方

最近注目されているオートファジーに類する機能は人間の集住地にもあると考えるのが自然であろうが、集住地が都市に変質するとそれが大きく揺らぎ始めたように思われる。あるいはジェイン・ジェイコブズのように都市が集住地の起源と考えれば、人間の集住地はもともと揺らいでいたということになる。いずれにしても都市が揺らぎ過ぎて均衡に復せず自己も環境も破壊した事例は歴史上多数見られる。

都市が近代都市になると揺らぎは急激に大きくなったが、同時に急速な市場経済拡大や技術開発が生じて負担を遠隔地にまで押しつけることができるようになったため、都市は自己を維持しつつ環境をより広域に破壊し始めた。そしていわゆる後期近代の巨大都市になると暴走が止まらなくなり、いよいよ崩壊は内外ともに激しくなってきた。人間社会は「都市型社会」と言われるまでに変質してしまい、いまや「人類と地球のサステイナブルな未来は、メガシティに大きく委ねられている」（村松伸ほか編『メガシティ』シリーズ、東京大学出版会、2016年）という危機的状況である。それが「近代が残したものは歪んだ都市と壊れた地球」という結末に終わるのであれば、都市は大量破壊装置に変質してしまったということになる。

人間の集住地のオートファジーが都市化によりオートファニーに変質すると考えれば、様々な事態が整合的に理解できるように思われる。その

メカニズムを解明することはイグノーベル賞を目指す人に任せるとして、ここではそのイメージを一言で分かりやすく表現すると、都市が「走れコータロー」になってきたということである。あるいは、場所に支えられてきたものが場所を更新せず場所そのものを喰い始めたということである。

近代都市のこの問題が数十年も前から、あるいはそれより遙か昔から、識者により様々な表現で指摘されてきたことは広く知られている。例えば比較的最近のものを見ると以下のような見方がある（複数の著作の記述を並記したものもある）。

「都市化とは意識化である／「無意識」は勘定に入っていない／都会で排除されるのは、意識が作らなかったもの、すなわち自然である／雑木林とはすなわち「空き地」なのである／そこにマンションを建てたら、何棟建つかという場所である／それが「開発行為」であろう／「進歩」「発展」などと呼んでいるのは都会人の夜郎自大である」

(養老孟司)

「都会の人は家畜化してる／Nature Deficiency Syndrome／自然欠乏症候群」

(C・W・ニコル)

「都市の輝く尖塔は／人類の傲慢をも示す」

(エドワード・グレイザー)

「現代都市という病」

(近藤祐)

「都市の再編という反復的な発作」

(デヴィッド・ハーヴェイ)

「場所性が零度まで漂白された開発への資本の投資は／荒廃した未来都市を思わせる」

(槇文彦)

「経済が越境する。文化が普遍性を帯びる／
「都市」が見えなくなる／非場所と化した大都市」

(磯崎新)

「なにもない風景を眺める」

(文谷有佳里)

「現在の東京は／近代主義思想の空虚な結末
／大都市の過度な均質化はひたすら非人間的な道」

(伊東豊雄)

「社会的弱者の居場所をきちんと作ってこなかった日本の都市政策の無策／妬みや嫉みが蔓延する息苦しい社会」

(平田オリザ)

「近代的都市計画に内在する矛盾がいたるところで噴出／かつてない社会的、文化的混乱」

(宇沢弘文)

オートファジーがオートファニーに変質する原因をジェイン・ジェイコブズの晩年の著作などを踏まえて考えると、計画原理主義と市場原理主義という2つの原理主義、及びそれらの不適切な結びつきに帰することができるかもしれない。しかしそれ以前に、都市というものが極めて複雑な存在であること、それにもかかわらず計画が画一的、標準的であること、という問題もある。

孫子の兵法を参照するまでもなく、まずもって政策対象である都市が一体何であるか、自らの道具が一体何であるかを深く考察する必要がある。計画(制度、事業)は社会の単なる道具のひとつに過ぎず(それがあまり無くても上手くいく社会の方が良いに決まっている)、市場も同様である(市場経済は経済の一部に過ぎず、経済は社会の一部に過ぎず、社会は生態系の一部に過ぎない)という当然のことをまずは認識する必要がある。

計画原理や市場原理が自己目的化してしまうと暴走は止まらない。それらが暴走するということは内と外との間に高い壁があるということである。内と外とで論理、倫理が異なるということである。都市を再生することとそのような歪んだ構造を破壊することとは表裏一体の問題である。

4. 都市をシステムとして考える

“URBAN21”は都市にオートファジーを回復するための提言を行った、と理解することができる。内向き組織が現実離れした威勢のいいことを元気に言っている間に組織も社会も崩れ一般の人々を不幸のどん底に突き落とす、ということは過去に何度も見られたことだが、オートファジーの再生はそこから抜け出す唯一の道かもしれない。

オートファジーを考えるということは都市をシステムとして考えるということである。例えばオートマトンの発想を持てば、都市政策は入力(制度、事業)だけではなく内部状態(状況)や出力(結果)をも視野に入れて、いやむしろ後者をこそ視野の中心に置いて、主に社会の観点からシステムの一部として考察されなければならないという極めて当たり前のことが今更ながら分かる。

この「オート」の視点は世の中が循環して入れ替わるために最も必要なものであり、これから「下り坂」に入るこの国の人々が真の豊かさを得るために最も強く求められるものでもある。もちろん「総活躍」もそれがあってこそである(というのはオートジジーの感想である)。

都市の「オート」で重要な役割を果たすもののひとつが不動産流通である。不動産流通が何を食って何を作るのかが都市の形を決めるひとつの大きな要素になる。また、近代都市計画は場所を上から見下ろす姿勢で人々の具体的な生活に寄り添わないところがあるので、「オート」の力を引き出すためにはその仕組みを見直す必要がある。つまり不動産流通政策と都市政策との連携がこれから大切になる。そのようなことも含めて都

市をシステムの視点で詳細に調査分析することは政策を高度化するための必須の大前提である。

ところで、オートファジーは再帰的な動的平衡のシステムであろうが、近代都市は自己保存のシステムというよりは自己変質のシステムである。あるいはそもそも人間という生き物自体がそういう生き物である。自己の行動のあり方が自己を変質させていく。そう考えれば、消費者余剰、生産者余剰を極大化させることが最も望ましいなど考えるのは現実から乖離した単なるひとつの価値観に過ぎず、それを絶対的な真理であるかのように主張するのはかなり悪質である。もちろん、再帰性を考慮するまでもなく、目一杯消費できることが最も幸せだなどと主張すること自体が馬鹿げていることは常識で考えれば分かる。特に都市では市場メカニズムの拡大で人間の生の形そのものが大きく変わってしまうので、それが果たして幸福を大きくする方向なのか否かは価値観に依存する問題である。

そう考えると、都市のシステムは動的平衡というよりは自己組織化やオートポイエーシスである。だから都市は揺らいで倒れることを繰り返してきたのであろう。都市では人間自体が大きく変質して別種の生き物になる可能性が大きく、それを反映して都市は洗練されたものになる可能性もあり粗野なものになる可能性もある。生態系を再生する可能性もあり地球を破壊する可能性もある。当たり前だが景観もそのような視点で考えるべきであり、見た目だけを云々するのは極めて馬鹿げている。

このような複雑なシステムである都市を近代都市計画という単純な仕組みで統制できると考えること自体がそもそもおかしいような気もするが、複雑なシステムを単純な仕組みで制御できないとは必ずしも言えず、また、これまでそれでやってきたという現実もあるので、その意義と課題とを冷静に見極めることが必要であろう。

ただし、これまでは動的平衡という視点ですら希薄であったのだから、都市運営の仕組みは相当な改革を必要とする。このままでは都市は人間社

会や地球にできた癌細胞のようなものとして増殖し転移しネットワークをつくり世界を破壊していく可能性がある。近々決定される予定になっている国連の“Transforming our world: the 2030 Agenda for Sustainable Development”の視点で見ても近代都市や近代都市計画の在り方の抜本的な見直しは必至であろう。

そうは言っても都市の実態を解明することは容易ではない。そこで当面採るべき方針はふたつ。ひとつは、都市を生活者のための空間に作り直すこと（「都市間競争」などより格段に優先度が高い）。もうひとつは、人々を田園回帰させ都市を極力縮小させること。このふたつをミックスした動きが出てきていることは政策の場では既によく認識されているはずである。

なお、上記のシステムの視点は特に生物学で有用なものと思われるが、これからの都市計画も工学よりは生物学を参照して見直されるべきかもしれない。

さて、以上のような都市の状況を踏まえると、“URBAN21”の意義もよりよく理解できるように思われる。そこで以下ではその内容を念頭に置きながら関連する文献を眺めていくことにしたい。引用する文献は都市政策関係者には馴染みのあるものが多いと思われる。

5. 都市デザインの新しいマニフェスト

最初に見るのは“URBAN21”でも引用されている論文で、これは都市政策関係者の間では極めて有名なものであるらしいが、その内容はこの国にとってますます重要になっているように思われるので、少し詳しく見ていきたい。

その論文は Jacobs, A. and Appleyard, D, “Toward an Urban Design Manifesto”, APA JOURNAL 53, 1987 であるが、これは1982年に公表された論文に新しく前書きを付けたものである（Appleyardは既に亡くなっていたので前書きは Jacobs が書いている）。以下、内容を紹介していく。

(1) A 1987 prologue

今日の都市形態に最も大きな影響を及ぼしているのは CIAM の the Charter of Athens と garden city movements であることはよく知られているが、この論文の立ち位置は “We, like others, were pleased with neither movement’s principles” と示されている。そのため “It was time for something different, something better” と考え（それは “student-generated” であった）、“what urban places ought to be” の探求を開始するが、“the research into what makes good places to live will be endless, often without conclusion, and always value-laden” との考えに至る。それで “The word “Toward” in the title is important” と説明されるが、これは人と都市とが再帰的な関係にあるためであろう。

(2) Prologue

CIAM（実際には Le Corbusier の独断執筆とも言われる）の the Charter of Athens の影響力の下で現代都市は次のようなものになってしまった。

new high-rise, high density buildings set in open space /

Housing was to be removed from its traditional relationship facing streets /

CIAM の思考は次のようなものであった。

The emphasis of CIAM was on buildings and what goes on within buildings that happen to sit in space, not on the public life that takes place constantly in public spaces. The orientation is often inward /

これは計画原理主義、市場原理主義にはまことに好都合な形態であったろう。

一方、Ebenezer Howard の the Garden City

movement の影響も同様に大きかったが、“buildings in a park” という概念は両者に共通のものであった。また “superblocks, separate paths for people and cars, interior common spaces, housing divorced from streets, and central ownership of land” という特徴も両者に共通であった。

両方のムーブメントは工業都市の問題状況すなわち “crowded, lightless, airless, “utilitiless,” congested buildings and cities that housed so many people” に対処するためのものであったが、“the utopians did not inquire what was good about those places, either socially or physically” という近代の特徴を有していた。そして現実には以下の状況が続いている。

The scale of capitalism has continued to increase, as has the scale of bureaucracy, and the automobile has virtually destroyed cities as they once were /

(3) Problems for modern urban design

ここで指摘されていることはこの国の今の問題状況を考える上で大変参考になる。

Poor living environments

the surroundings of homes are still frequently dangerous, polluted, noisy, anonymous wastelands /

Giantism and loss of control

The urban environment is increasingly in the hands of the large-scale developers and public agencies /

People, therefore, have less sense of control over their homes, neighborhoods, and cities /

Large-scale privatization and the loss of public life

creating Galbraith’s “private affluence and

public squalor” /

Centrifugal fragmentation

work out of the home, and then out of the neighborhood /

shopping out of the local community. Fear has led social groups to flee from each other into homogeneous social enclaves /

Destruction of valued places

the very value of the place threatens its destruction as hungry tourists and entrepreneurs flock to see and profit from it /

Placelessness

Cities are becoming meaningless places beyond their citizens' grasp /

Injustice

Cities are symbols of inequality /
the discrepancy between the environments of the rich and the environments of the poor is striking /

Rootless professionalism

we design for places and people we do not know and grant them very little power or acknowledgment /

This floating professional culture has only the most superficial conception of particular place /

この最後の点は特に深刻な問題である。いまだに金太郎飴的な施策が専門家の検討の結果として雨後の筍のように全国的に発生するのは恐るべき現象である。

(4) Goals for urban life

良好な都市環境を実現するために7つの目標が提案されている。

① Livability

A city should be a place where everyone can live in relative comfort.

言うまでもなく都市政策はホームレスや生活困窮者などいわゆる社会的弱者を最重視して企画立案されるべきである。

② Identity and control

People should feel that some part of the environment belongs to them, individually and collectively, some part for which they care and are responsible, whether they own or not.

人間の存在と環境の存在とは相互依存関係にあるという当然のことが分かっているならば人間を都合よく移転させようという発想、環境(もちろん景観を含む)を上から設計しようなどという発想は出てこない。地域に肯定されるからこそ地域への責任感も生まれる。ただ単に需給が一致すればいいという問題ではない。ニーズが満たされればいいという問題ではない。

the urban environment should encourage participation. /

should increase people's sense of identity and rootedness /

地域形成に参加しない単なる投資目的の不動産購入が拡大するというのも深刻な問題である。

Respect for the existing environment, both nature and city, is one fundamental difference we have with the CIAM movement.

市場経済のフロンティアが消えつつある中で、この相違はますます致命的になる。

③ Access to opportunity, imagination, and joy

People should find the city a place where they can break from traditional molds, extend their experience, meet new people, learn other viewpoints, have fun. /

都市にはハレの空間、祝祭的空間が必要である、が・・・。

Until now such fantasy and experiment have been attempted mostly by commercial facilities, at rather low levels of quality and aspiration, seldom deeply experimental.

皮相的な遊園地空間が拡大している。

There should be a place for community utopias; for historic, natural, and anthropological evocations of the modern city, for encounters with the truly exotic.

日常のものとは異なる時間と空間とを感じさせる場所でありながら根のある場所が必要である。それは後期近代の非常に大きな課題である。

④ Authenticity and meaning

People should be able to understand their city (or other people's cities), its basic layout, public functions, and institutions; they should be aware of its opportunities. /

An authentic city is one where the origins of things and places are clear. /

これらは本物空間を維持するための前提ともなる (Authenticity は都市政策の世界ではしばらく前から流行り言葉になっているらしい)。

以上の諸項目と以下の諸項目とでは対象とする空間の広がり異なる。

the city has to serve some higher social goals as well. It is these we especially wish to emphasize here.

⑤ Community and public life

Cities should encourage participation of

their citizens in community and public life.

これは都市社会を形成するための基礎である。もちろん安全、快適、便利よりも本質的な基礎である。

A city should / breed a commitment to a larger whole, to tolerance, justice, law, and democracy. The structure of the city should invite and encourage public life, not only through its institutions, but directly and symbolically through its public spaces.

真の公共を産まない場所、すなわち不産の場所では、特定の利害で結びついた内向き集団が増殖しつつ一般の個人がバラバラになって流寓する。

The public environment, unlike the neighborhood, by definition, should be open to all members of the community.

都市社会の基礎を作るものとしてはAKB(安全、快適、便利)もさることながらPEA(Public Environment for All)が重要である。

⑥ Urban self-reliance

"Soft energy paths" in particular not only will reduce dependence and exploitation across regions and countries but also will help reestablish a stronger sense of local and regional identity, authenticity, and meaning.

エネルギーの自己調達は単に需要を賄うという直接的目的よりも深い意味があることが分かる。それが形成する地域は補助金依存地域とは真逆のものである。

⑦ An environment for all

Good environments should be accessible to all. / Good urban design must be for the poor

as well as the rich. /

都市間競争で金のある人間ばかりが集まる場所は都市ではなくなる。

(5) An urban fabric for an urban life

上記の目標に向かうためには以下の 5 つの physical characteristics すべてが存在が必要である。

① Livable streets and neighborhoods

Usually it has meant specific standards and requirements /

Livability standards / have often been excessive. /

Our approach to the details of this inclusive physical characteristic would center on the words "reasonable, though not excessive. ..." /

道路の幅や日照、騒音のレベルなど個々の基準では "livable" な場所は形成できず、むしろ破壊してしまう。

② Minimum density

By density, we mean the number of people /

重要なのは物の密度ではなく人の密度である。

We are impressed with the importance of density as a perceived phenomenon and therefore relative to the beholder and agree that, for many purposes, perceived density is more important than an "objective" measurement of people per unit of land.

しかも重要なのは人の客観的な密度ではなく人々の認識と相対関係にある密度である。すなわち "where people live in greater proximity to each other" である場所が "higher density" の

場所である。人々の関係性が大きいということが密度が高いということである。だから行政サービスの都合で人口密度を高くしても必ずしも密度が高いとは言えない。

日中に人口が激減する住宅密集地（都心のタワーマンションなど）は人口密集地とは言えない。激減していなくても周囲の地域との活発な交流がなければ人口密集地ではない。だから都市政策の中心課題は物的整備ではなく人間関係形成（つまり社会形成）である。

Beyond residential density, there must be a minimum intensity of people using an area for it to be urban /

これは特に "public or "meeting" areas of our city" に関して述べられている。具体的な密度の提案は "URBAN21" に引用されているとおりで、"We aren't sure what the numbers are or even how best to measure this kind of intensity" とも述べられており、人間関係は風土や文化によっても異なるであろうから、地域にあった密度を個々に模索することが必要になる。

③ Integration of activities

The best urban places have some mixtures of uses. The mixture responds to the values of publicness and diversity that encourage local community identity.

近世の都市は基本的にこのようなものだった。

It is the mix, not just the density of people and uses, that brings life to an area /

近代の分離の思想とは真逆の思想が街に命を育む。

If we envision the urban landscape as a fabric, then it would be a salt-and-pepper

fabric of many colors, each color for a separate use or a combination. /

It would not be patchwork quilt, or an even-colored fabric. The fabric would be mixed.

この景観は上からの計画や規制ではできない。

④ Buildings (and other objects that people place in the environment) should be arranged in such a way as to define and even enclose public space, rather than sit in space

A tall enough building with enough people living (or even working) in it, sited on a large parcel, can easily produce the densities we have talked about and can have internally mixed uses, like most "mixed use" projects. But that building and its neighbors will be unrelated objects sitting in space if they are far enough apart, and the mixed uses might be only privately available.

タワーマンション内の格差が最近大きな問題になっているが、それ以前にそのような建物と周辺との分断が大きな問題である。そのような建物が多くなればなるほど都市は "Good City" から離れていく。これはもちろんタワーマンションに限らない。

buildings in space tend to be private and inwardly oriented.

巨大開発が席卷する都市からは都市社会が消えていく。巨大開発に伴う単に空いているだけの、人気がありません、広々とした公開空地が増えているという現実がある。

It is important for us to emphasize public places and a public way system. /

the central value of urban life is that of

publicness, of people from different groups meeting each other and of people acting in concert, albeit with debate. /

社会的共通資本こそが都市の本質である。だから既存の社会的共通資本を潰して開発を行うことは都市破壊につながる。

The most important public places must be for pedestrians / Most public space has been taken over by the automobile /

車社会と都市社会の関係性の再考が必要である。

There also must be symbolic, public meeting places, accessible to all and publicly controlled. /

there must be a healthy public circulation system. It cannot be privately controlled. /

公共空間を再生するためのハードの整備はソフトの設計に適合するように行わなければならない。そしてそれは民活や規制緩和や都市間競争などではできない。

⑤ Many different buildings and spaces with complex arrangements and relationships

Socialist and capitalist ideologies alike called for land assembly to permit integrated, socially and economically useful developments.

巨大開発は計画原理主義にも市場原理主義にも好都合だった。

Health, safety, and efficiency can be achieved with many smaller buildings, individually designed and developed.

小さな不動産を破壊せず小さなまま流通させる施策が必要である。

With smaller buildings and parcels, more entrances must be located on the public spaces, more windows and a finer scale of design diversity emerge. A more public, lively city is produced.

小さな不動産こそが都市の公共性をつくる。都市そのものをつくる。

(6) All these qualities ... and others

There are other characteristics as well: public buildings, educational environments, places set aside for nurturing the spirit, and more. We still have work to do.

この延長上にパタン・ランゲージが位置するの
か否は議論があるところであろう。

(7) Many participants

a good city fabric, the *process* of creating it is crucial. As important as many buildings and spaces are *many participants* in the building process. It is through this involvement in the creation and management of their city that citizens are most likely to identify with it and, conversely, to enhance their own sense of identity and control.

ここに重要な再帰過程がある。市民が都市形成で主体的に活動する場所こそが都市である。そうでない場所は非都市である。より良いプロセスのあり方を探求しなければならない。

(8) An essential beginning

We have to know more about what configurations create public space: /

When we know more we will be still further

along toward a new urban design manifesto.

型を探求する無限のプロセスがある。

(9) まとめ

プロセスの改善と型の探求とはお互いに強め合う関係にある。その関係を強めていくような不動産流通の仕組みが二枚重ねの戦略の中に組み込まれることが望ましい。また、目標の5原則は公共空間を軸にするものであるが、二枚重ねの戦略においても公共意識が軸になる必要がある。

そう考えれば、都市政策においては、土地や建物の形状の規制や開発事業の誘導などもさることながら、最も重要なのは公共的な人間関係を形成することであり、それにより都市特有の公共性を育むことである。だから不動産流通においても、効率よく公平に不動産を回すということはもちろん重要だろうが、最も重要なのは人間関係を強め公共性を高めるということである。つまりモノを回すこと以上に人を繋ぐことが重要である。特にこれからのこの国では都市の中の人間関係を再構築していくことが喫緊の課題である。人間が個化したり相互扶助が家庭内に押し込められたりすれば社会は崩壊していく。

6. グッドな都市

上の論文が出されてから既に約30年が経過している。その間、世界の都市がよい方向に向かったという実感はない。むしろ悪化している。Jacobsが2011年の著書の中で改めて上記内容の意義を述べた背景にはそのような事情があるに違いない。そこでここでもその著書、Jacobs, A., "The Good City - Reflections and Imaginations - ", Routledge, 2011から上記論文を補足するように述べられている箇所の一部を引用しておきたい。

(1) Authenticity and meaning について

People should be able to understand the form and basic layout of their city as well as its

environmental context and the interrelationships between the two.

まちづくりの再帰過程を重視しているような表現であり、タイトルの副題である“Reflections and Imaginations”もこれが前提になるのであろう。特に風土との関係を次のように指摘している点は重要である。

This means an understanding of the climate, the land, the water in and around the city, and the opportunities and constraints that these afford for daily life. Urban authenticity and meaning include knowing and valuing where food comes from, what grows where one lives, and what does not. An authentic city is one where the origins of things and places are clear.

都市の健全なシステムを維持するためにはまず何より自然との関係を重視することが重要である。また土地の歴史も重視しなければならない。それらと無縁に人工物を積み上げ続ける行為はオートファニーの暴走である。

(2) Urban self-reliance について

Cities should strive to be self-sustaining. This is particularly true in regard to the use and reuse of natural resources and the disposal of waste. Amazing amounts of needed food and fiber can and should be grown within cities or immediately adjacent to them, within a one night's journey.

都市から農地を排除しろなどという江戸時代までのこの国の都市の歴史を無視したような市場原理主義思想がかつて蔓延していたのは一体何だったのか、改めて反省することが有益であろう。

(3) The good city の条件

これは元の論文にも書かれていたことだが、

the good city であるための条件が次のようにまとめられている。

the good city is one that somehow balances these goals, allowing individual and group identity while maintaining a public concern, encouraging pleasure while maintaining responsibility, remaining open to outsiders while sustaining a strong sense of localism, using the natural environment while at the same time conserving it.

(4) 例外とすべき巨大開発

巨大開発は例外であることが次のように強調されている。

Of course, there is a need for larger buildings, too, covering large areas of land, but they will be exceptions in the good city, not the rule. Public buildings, city hall, the main library, the public courts building, museums, and churches may all qualify, corporate or private offices should not.

(5) 車社会の問題

車社会の問題が改めて強調されている。

The most important public places are for pedestrians, for no public life can take place between people in automobiles.

7. 都市政策のEA改革

都市をつくる上でPEAが基礎になることは先に触れたとおりだが、それで連想されるのがEAである。それに関しては次の文章が分かりやすく説明している。

「RMAの目的は「機略戦」から「ネットワーク中心の戦い（NCW：Network Centric Warfare）へ軍事コンセプトをシフトさせることにありま

す。NCW で中核となるのは OODA ではなく、ネットワークを介した情報と、それを支えるシステムです。(中略) NCW の最も大きな特徴は、これまでの厳格な統制を廃し、ネットワークでつながった小さな集団がそれぞれ状況に応じた最適な行動を取り、組織そのものが自己同期化によって常に、学び、成長していくところにあるのです。そう考えると PDCA がうまくサイクルしない理由は OODA ループがうまくサイクルしなくなった理由とほとんど同じ(中略)。PDCA モデルを、組織や情報がどんどん複雑化、多様化する営業部門やマーケティング部門で無理に取り入れようとしても、分析や計画ばかりで意思決定に至らなかったり、実行してもサイクルしなかったり、というようなことが頻発してしまうのです。(中略) 代わりに考えたのは自分たちが属している数名のチームで Experiment (実験) - Adapt (適用) を繰り返すことでした。僕らはこれを EA チェーンと呼んでいました」

(篠井哲治『今すぐできる「戦略思考」の教科書』講談社、2010年)

(注)

RMA : Revolution in Military Affairs

OODA : Observe - Oriented - Decide - Act

また、次の記述も参考になる。

「ボストン市は管理的手法から起業的手法へとかじを切ったという。計画を立てコントロールしながら物事を進める方法から、まず動いて、問題が起これば修正を重ねる方法への転換だ。経験・エクスペリエンス (E) と適応・アダプテーション (A) がキーワードである」

(廣瀬茂夫「PDCA から EA へ」日本経済新聞 2016年 8月 12日夕刊)

両者で EA の文字の意味は多少異なるが、EA の内容はだいたい同じである。都市づくりにおいても、その主体が行政から住民に移るにつれて、PDCA より EA の仕組みが現実に即した実践的なも

のになる。一般の人々の日常から乖離した計画の仕組みはますます機能しなくなるであろう。一般の人々が十分な議論をしないまま街の様相が計画で変化していくことが極めて望ましくないことは Jacobs が指摘しているとおりでである。土地から乖離した計画、土地の微細な状況に応じてきめ細かく変化することができない計画ではこれからの都市づくりはうまくいかない。この点は都市政策の現場では既に十分に認識されていてしかるべきであるが、例えば以下のような指摘がある。

「これまでの社会構造、都市構造を形づくってきたのが、マスタープラン型の都市計画であり、まちづくりだ。(中略) 不確定要素に対しての想像力は働かない。何も疑わず活性化することが前提となった、演繹的な方法が、今までの都市計画だった。

しかし、それが限界にきていることはすでに誰もが知っている。都市計画、そしてまちづくりは、新しい方法論を希求している。それがネットワーク型である。(中略) 活発な部分が、複数の場所で、同時多発的に生まれ、それらが共鳴しあってつながってゆく」

(馬場正尊+Open A『エリアリノベーション』学芸出版社、2016年)

8. 都市と生物

Jacobs の基本的な考え方に関して T・J・ケント・Jr. がアラン・ジェイコブス『サンフランシスコ都市計画局長の闘い』(代表・蓑原敬訳、学芸出版社、1998年)の中の「著者紹介」で次のように述べている。

「サー・パトリック・ゲデスが、彼の 1915年の著作『都市の進化』で述べた以下の見解と全く同じ見解を彼が持っていることを彼の事績は証明している。すなわち、「都市計画はある場所で学び、他の場所でそれを真似ることができるといったものではない。それはある一つの地域の生活

の展開であって、その独自の道筋に沿って、それ独自の基礎の上で改善し、展開ができるものなのだ」

これは上記の EA の方式に近い。都市計画は本来はそのようなものとして展開されるべきものだったのかもしれない。この点に関してはゲデスがさらに以下のように述べている。

「あまりにも多い過去の伝統や現代の世界からの示唆を前にして、新たな危険が生まれてくる。その危険とは、われわれが賛美するものを模倣しようとするあまり、われわれ自身の住んでいる場所や時代や生活習慣からかけ離れてしまうことである。(中略) 昔からの錯綜した町を貫いて無性格な眺望をつくったり、広い並木道を通したりすることが、多くの都市計画家を満足させてきたと思われるし、(中略) 至る所で精力的に繰り返す多くの計画がなされてきたが、そんなものは(中略) 都市計画の貧弱な見本に過ぎないし、事実それらは真の都市設計にとってかえって新しく遅延の要因となり、新たな障害となってきた。

真の地方開発、真の都市計画、真の都市設計、これらは上述のようなあまりにも安っぽい適応や模倣とはまったく異なったものである。真の設計や妥当な計画は、その地方と地域の条件を十分利用するよう具体化すべきものであるし、地方と地域の個性の表現でなければならない」

(パトリック・ゲデス『進化する都市』西村一朗訳、鹿島出版会、2015年)

ミニ東京と揶揄された金太郎飴的な市街地が全国に広がったことは大いなる反省材料であろう。ゲデスの人物紹介は以下の記述が簡潔で分かりやすい。

「彼には地域計画家の顔の他に、本来、著名なダーウィン進化論者 T・H・ハクスレーの影響を強く受けた生物・生態学者という別の顔がある。

別の顔という形容は適切ではない。ハクスレーは生物組織(有機体)と環境の関係を地域(特定の環境圏)から説明しようとし、ゲデスは、その際にハクスレーの友人でもあったスペンサーの社会進化論に影響を受けたこともあって、元来それを人間社会に敷衍しようとした生物学者だったというのが正確だからだ

(八束はじめ『ル・コルビュジェ 生政治としてのユルバニスム』青土社、2014年)

ゲデスは「人間と場所の相互的發展を行なうべきだ」(同)との考えを持っていたということであるから、やはり再帰のプロセスを重視していたと考えられる。都市政策を生物学的システム論の観点から根本的に見直すことがやはり必要であろう。

[わたなべ なおゆき]
[元(財)土地総合研究所勤務]